

2014年度

博士学位申請論文  
(要約)

主査 飯島 渉 教授

論文題目

明末の経済発展と地域秩序の問題  
—江西省東北地域を中心に—

The Economic Development of the Late Ming and a  
Regional Order : Focusing on the Northeastern Area  
of Jiang Xi Province

青山学院大学大学院  
文学研究科  
史学専攻

日野 康一郎

## 序章

明末清初期は、中国史における大きな転換期の一つとされる時代である。商工業の発展と海外貿易の拡大は都市の興隆を促し、華やかな庶民文化が花開いた。また、貨幣経済は農村へも浸透して家内工業が発達する一方、多くの人々が農村を離れて都市で手工業労働やサービス業に従事した。しかし、その繁栄の裏で都市と農村の格差、貧富の格差が広がり、都市や農村では、暴動や、小作料の不払い運動が起こり始め、地域秩序の動揺が始まる。それは、やがて小規模な反乱から地域を越えた大反乱へと発展して明朝を滅亡へと追いやり、清朝の時代が始まるのである。これまで、この激動の明末清初期について、資本主義萌芽論や、郷紳論、さらに地域社会論や、グローバルヒストリーから見た考察論など、様々な視点からこの時代の持つ特質が研究されてきた。しかし、そのいずれも指摘するのが、明末における経済発展と、それを背景にした「地方の台頭」である。

そこで、本稿では、主に明末清初期に起きた暴動・反乱を題材に、この時代の経済発展と、それが地域社会に及ぼした影響を考察した。具体的には、江西省を舞台に起きた明末の反宦官民変と、清初の反乱を主に取り上げた。江西省を考察対象にしたのは、この地域が、中国華中地方において、政治・経済上、特色ある地域の一つであるからであり、そのなかで東北地域を選んだのは、この地区が山地開発や都市開発の進む経済の発達した地域であったからである。その考察については、以下の構成で進める。

まず、明末の反宦官民変について、第一章から四章まで、明の万暦年間（1572～1620）、江西省上饒県で起きた民変について考察する。この民変は、中央より派遣された宦官潘相が、上饒県にある禁山区、銅塘山で、樹木の伐採や鉱山開発を実施したことから起きた暴動である。そして、第五章と第六章では、江西省浮梁県景德鎮で起きた暴動、景德鎮民変について考察する。上饒県と同じく宦官潘相が引き起こした暴動であり、すでに先行研究はいくつかあるものの、本稿ではあらためて宦官の立場から考察を行う。

次に清初の反乱として、第七章で、清代康熙年間（1661～1722）に起きた柯昇と程鳳の叛乱を扱い、最後に第八章では、考察の舞台を江西省から、明清の首都北京へと移し、明末北京における流入民の問題と、それが明末の政局に与えた影響について考察した。以上の構成により、現代中国の問題にもつながる明末清初期の問題について明らかにする。

## 第一章 銅塘山の歴史

### 序

本章では、上饒県民変を考察するにあたり、まず銅塘山の歴史を考察した。銅塘山は江西省広信府上饒県にそびえ立つ山である。宦官潘相がこの山を開発しようとして、上饒県民だけでなく、官僚たちにまで反対されたのは、この山が禁山区に指定されていたからであった。そこで、本章では、銅塘山がなぜ人々の立ち入りを禁止した禁山区に指定されたのか、その歴史を、上饒県知県李鴻の記した「封禁考略」と「歴代法令」という、銅塘山の地理歴史について書かれた史料を基にさぐった。

#### 一 広信府と銅塘山の地理的位置

先述のとおり、銅塘山は、広信府上饒県に位置する山である。広信府は、浙江省・福建省と境を接する辺境の地であり、浙江・福建方面へと進出する交通の要衝でありながら、未だ開発の及ばない地域であった。開発が進み始めるのは漢民族の南方移住の始まる魏晋南北朝時代のことであり、唐代半ば以降にその動きが本格化する。

こうした江西・浙江・福建を結ぶ交通の要衝に人々が移住を始める事態に、王朝もこの地域の管理の必要性を感じ、ここに信州と呼ばれる行政区画を置き、移住民の管轄を始めた。

さらに宋代には山間部に関所を築いて、交通の管理も行うようになる。その区域が銅塘山であった。やがてこの山に対する管理は、宋・元を通じて厳しさを増していき、ここに山地を開発する移住民と、これを管轄しようとする王朝の確執が生まれた。やがて、宋・元の後を受けた明朝は、こうした歴代王朝の方針を継承、強化し、この地域への立ち入りを禁止する禁山政策を採るようになるのである。

## 二 禁山区としての銅塘山

その禁山区は、「内山」・「外山」と呼ばれる二つの区域に分かれていた。「内山」が明初に設定された区域であり、「外山」が明中期に鄧茂七・葉宗留の乱が起きて後、設定された区域である。明初に禁山区が設定されたのにもかかわらず、その後もこの地域へ入る者は後を絶たなかった。人々は王朝の取り締まりには武力で抵抗し、やがて鄧茂七・葉宗留の乱へと発展した。そのため、明朝は「内山」の外にさらに禁止区域を設定し、禁山区を拡大した。それが「外山」である。こうしてようやくこの山への移住を防ぎ、治安も安定するかに見えた。

## 三 万暦年間の銅塘山

しかし、その後も銅塘山へ侵入する者の勢いは止まることはなかった。「封禁考略」・「歴代法令」の著者、李鴻が上饒県知県に赴任する頃には、山区内に多くの人々が移住して独自の勢力を作り、王朝の取り締まりに抵抗できるほどに力をつけていたのである。

### 小結

このように、李鴻の書き残した史料を基に銅塘山の歴史を考察した結果、銅塘山が禁山区に指定された背景には、漢族の南方進出以来、平野部から山地へ開発を進める移住者と、これを管理したい王朝の確執の歴史があったことが明らかとなった。そして、万暦年間に宦官潘相が江西省に派遣されると、長年にわたる禁山の方針が撤回され、銅塘山の開発が行われることになるのである。

## 第二章 上饒県民変と山地開発の問題

### 序

本章では、この禁山区の開発をめぐる起きた上饒県民変を考察した。万暦 24 年(1596)、万暦帝は全国に宦官を派遣して、礦税・商税の徴収を行わせたが、これに反発して各地で民変と呼ばれる暴動が起きる。この上饒県民変もその一つで、これは万暦 27 年(1599)に江西省に派遣された宦官潘相が、銅塘山を開発しようとしたことに反対して起きた暴動であり、上饒県民のみならず、官僚からも反対の声が起きた。これまで、民変の研究といえば、資本主義萌芽論の観点から暴動を起こした都市民に焦点が当てられたが、本章ではむしろ宦官と、山地開発を実施した人々の観点から考察を行った。また、この民変に対応した地方官僚の動向にも注意を払った。

### 一 民変の経過

民変の原因となった銅塘山の山地開発は、潘相の部下たちの勧めにより始められた。これに対し、上饒県民は二度にわたって暴動を起こし、実力でこれを阻止しようとした。一度目の暴動は上饒知県李鴻が、潘相の部下を収監したと偽ることで鎮静化する。しかし、その後も潘相の部下たちの横暴が続いたために二度目の暴動が起これ、李鴻もやむなく潘相の部下

を収監し、県民を説得して暴動を治めるしかなかった。この行為が原因で、李鴻は潘相の怒りを受け、奪俸六月の処分を受けた後、さらに庶民の身分に落とされてしまう。李鴻は故郷へ帰り、まもなく病死した。

その後も潘相は山地開発を続けるつもりであったが、江西巡撫夏良心の説得により、山價銀 3000 両と土産の折價銀 1000 両を徴収することで、銅塘山開発を中止することにした。こうして銅塘山は元通り封禁されることになったのである。

## 二 民変の背景

本節では、以上の山地開発について、宦官潘相の側に立ち、実際に山地開発を行った人々の実態を考察した。潘相が銅塘山を開発した背景には、自ら人々を集めて山地開発を行える資本力を持つ開発業者の後押しがあり、彼らの中には仕事を求めて多くの移住民が集まり、開発業者の指示の下、山地開発に従事した。この開発業者らが、宦官に意見できるほど台頭し、多くの移住民らが集まった背景に、銅塘山における山区経済の発展があった。開発業者らは、万暦年間以前から、合法的に開発が行えるよう、官僚や地元有力者に働きかけを行い、万暦年間によく潘相を説得することに成功したのであった。

そして、上饒県民や地方官が開発に反対した理由に、彼ら民間業者による山地開発が地域に治安悪化をもたらし、宅地や墓地、田畑を破壊する環境破壊を引き起こしていたことが挙げられる。また、地方官僚の批判の裏には、地元で既得権益を持つ江西出身官僚の支持があった。

## 小結

以上のように、万暦年間の上饒県民変を考察した結果、潘相の下で、実際に山地開発を行った民間の開発業者の実態と、彼らの台頭を促した山区経済の発展、そして、地方官僚の反対運動を裏から支え、既得権益を守ろうとする地元出身官僚の動向が明らかになったのである。

## 第三章 上饒知県李鴻著「封禁考略」・「歴代法令」に関する一考察

### 序

上饒県民変は、上饒知県李鴻が潘相の部下を収監したことで鎮静化し、禁山区開発は、江西巡撫夏良心の説得により中止となった。李鴻自身は、暴動に対する処置について潘相の弾劾を受けたために、庶民の地位に落とされ、故郷に帰ってまもなく病死する。しかし、李鴻の友人、黄汝亨が李鴻の功績を称える墓誌銘を書き残したため、李鴻は潘相の禁山区開発を阻止した「名宦」として後世に名を残すこととなった。さらに、李の記した「封禁考略」と「歴代法令」も、上饒県の地方志に掲載された。実は禁山区開発問題は、明代だけでなく清代にもたびたび起こる。その都度、清代官僚が参考にしたのが、これらの李鴻の著作であった。また、本稿でも、明代の禁山政策の詳細を知ることのできる史料として李鴻の史料を大いに参考にした。そこで、本章では、李鴻の残した史料が清代の山地政策に与えた影響を考察し、さらにその史料が明代の禁山政策を考察するうえで有用な史料であることを確認する。

### 一 清代初期の禁山政策への影響

清代において、はじめに山地開発が問題になったのは、順治年間（1643～61）のことであった。張国材という人物が木材の伐採を勧めたことがきっかけで、江西巡撫蔡士英が銅塘山を調査することになったのである。命を受けた蔡士英は部下の地方官たちに山の調査を命

じ、各地方官たちはその調査結果を報告した。いずれの地方官たちも、山が険しく木材を運び出すのに困難なこと、山に適当な木材になる樹木はないこと、銅塘山が古くから反乱の根拠地になり、現在も山寇が活動していることを理由に、開発すべきでないことを報告した。これを受け、蔡士英は、銅塘山を開発すべきでないことを上奏文にまとめて提出し、開発は行われなかったことになったのである。その蔡士英の上奏文には、各地方官の報告が引用されている。そのうち、上饒知県沈獅や広信知府朱治泰の報告文を見ると、李鴻の「封禁考略」や「歴代法令」を主に参考にしていることが分かる。李鴻の残した史料は、今回の禁山区開発計画中止に一定の影響を与えたのである。

その後、李鴻の史料は、康熙『新修上饒県志』の「要害志」に掲載されることになった。この地方志は、もともと康熙11年(1672)に編纂が着手されたが、その途中、柯昇・程鳳の反乱が起きたために中断し、反乱鎮圧後、ようやく再開した経緯がある。柯昇・程鳳はそれぞれ清の武官であったが、三藩の乱が起きた際に三藩側に寝返って反乱を起こした人物である。彼らが反乱を起こしたことにより、三藩の一人、福建の耿精忠の軍が銅塘山を越えて江西省に侵入し、江西省の東部を占領する事態を招いた。このことから、反乱鎮圧後に編纂された『上饒県志』は、禁山区開発反対の立場にたった著作となり、李鴻の史料が掲載されることとなったのである。そして、乾隆9年(1744)に『上饒県志』が改訂された際も掲載された。

## 二 清代中期の禁山政策

しかし、一方で清朝は山地政策について、ただ明朝の政策を継承するだけでなく、独自に調査を行って、開発すべきか判断する動きもあった。雍正年間(1722~35)に、やはり山地開発を勧める上奏があり、調査の結果、開発は行われなかったが、雍正帝は必ずしも前例にとらわれず、開発の是非を考えるよう意見している。また、乾隆年間(1735~95)にも、乾隆帝自身が人口増加や物価高騰対策の為に山地開発すべきか、官僚たちに諮問している。この時、江西巡撫であった陳弘謀が開発計画を上奏するが、結局、官僚らの反対にあい、時の広信知府や江西巡撫の上奏により、禁山政策は継承されることとなった。その後、禁山政策継続の根拠として、これまでの李鴻の史料に替わり、彼ら広信知府や江西巡撫の上奏が新しく地方志に掲載されるようになった。しかし、李鴻の史料不掲載の理由も説明されており、李鴻の史料が禁山に関する著名な史料であったことがうかがえる。

### 小結

このように、上饒県民変は清代の禁山政策にまで影響を与えたことが分かる。また、李鴻の史料は、明清時代の禁山政策を考えるうえで重要な史料であることも確認できた。明末の上饒県民変は、明代に起きた単なる暴動の一つなのではなく、清代にまで影響を与えた暴動なのである。

## 第四章 明末清初期の禁山区開採論

### 序

第一章から三章で見たように、宦官潘相による禁山区開発は県民や官僚の強い反対で中止され、明清時代を通じて禁山政策は継承され続けた。しかし、官僚たちの間で禁山区の開発論は出なかったのでしょうか。実は開発論については宦官だけでなく、少数ながら官僚からも出ている。例えば、第三章で紹介したように、清代中期に陳弘謀が具体的な禁山政策開発論を唱えているし、さらにそれ以前の明末清初期にも禁山区の開発を主張する意見があった。第四章では、明末清初期の官僚による山地開発論を取り上げた。

## 一 万曆『鉛書』に見る開発論

官僚で開発論を提唱した者として、まず、万曆『鉛書』を編纂した笄継良、柯仲炯らがいる。万曆『鉛書』とは江西省広信府鉛山県の地方志である。その開発論は、『鉛書』の中の禁山政策について書かれた箇所に具体的に書かれている。彼らは、禁山政策に関してまず李鴻の史料を参考にしつつも、結論として、むしろ禁山区の開発を唱えている。禁山区に侵入者が相継ぎ、山寇の出没が絶えないのは、山地の立ち入りを禁止しているから、かえって不法集団として山寇勢力が形成されるのであり、むしろ王朝の管理の下、禁山区を解放して、山地資源を人々に平等に分配できるようにし、産業を興して、その利益が皆に行き渡るようにすれば、山寇の出没はなくなることを説いている。

## 二 王夫子の禁山区開発論

また、明末清初期の思想家、王夫子も禁山区の開発を提唱している。彼は流民・流寇の問題解決のために、流民たちを禁山区内に移住・定住させ、新たに地方行政区を置いて、彼らを管轄することを説いた。

### 小結

以上のように、山地開発論は、明末清初期より、官僚から提唱されていた。その具体例として、本章では、万曆『鉛書』と、王夫子の『噩夢』を取り上げた。万曆『鉛書』の編者や王夫子は、いずれも山寇や流寇といった離農者たちをもう一度、土地に定住させ、社会を安定化させるために、山地資源の有効利用を訴えた。しかし、彼らの意見は採用されるどころとはならず、いたずらに民間による非合法の山地開発は進み、環境は破壊されていった。そして、環境破壊の問題は現代中国でも続いている。上饒県民変における山地開発の問題は、明代だけの問題なのではなく、清代、そして現代中国の経済・人口・環境問題にもつながるのである。

## 第五章 景德鎮の社会問題

### 序

万曆 27 年（1599）に江西省に派遣され、上饒県民変を起こした宦官潘相は、景德鎮においても民変を引き起こしていた。潘相はむしろ景德鎮民変を起こした宦官として知られている。そこで、本稿では、景德鎮民変に関する考察を行った。考察にあたり、まず第五章において、景德鎮の抱える社会問題について検討した。景德鎮に関する先行研究は多く、その歴史や実態はかなり明らかにされている。この都市は陶磁器の名産地として国内だけでなく海外市場にまで販路を広げ、産業都市として発展を続けた。しかし、事業の拡大による労働人口の増加は治安の悪化を引き起こし、窯場の建設や燃料の木材伐採は環境破壊をもたらすなど、地域社会に動揺を与えたことも事実である。本章では、景德鎮の発展が地域社会に与えた影響について考察した。

### 一 景德鎮における治安問題

明清時代の地方官は景德鎮をどのように認識していたのだろうか。その一端を示す史料が、康熙『浮梁県志』巻 4、陶政にある。これによれば、景德鎮は、浮梁県城の郊外にあり、商工業者や失業者のたまり場と化し、盗賊が出没し、暴動の多発する統治の難しい地域と認識されていた。このことについて、明代官僚の残した史料と比較検討しながら、明代当時の景

徳鎮の治安問題を検討した。その結果、明代当時の官僚も、景德鎮が県中心部から離れた郊外に位置し、商人や手工業者が多く集まり、失業者が盗賊行為を働く難治の場所と考えられていたことが分かった。失業者らは、職があれば陶工として働き、なくなれば盗賊と化して、この地域の治安を乱したのである。この治安問題に対処するため、地方官は保甲制を実施し、饒州府の通判を駐留させることにより、焼造の管理と治安の取り締まりを強化することになった。

また治安の問題は、盗賊行為にとどまらず、暴動も起こった。『世宗実録』の記述によれば、嘉靖 19 年 (1540)、浮梁県民と楽平県民が衝突し、暴動に発展した事件がある。これは、景德鎮を流れる昌江の氾濫による食糧難から、経営者である浮梁県民が、従業員である楽平県民を解雇したために起きた。この暴動は、地方官が新たに窯場を建設して、そこに人々を移住させ、暴動の首謀者以外は寛大に処置することで解決した。

このように、景德鎮では様々な人々が集まり、盗賊の出没や暴動の発生する統治の難しい地域だったことが分かる。景德鎮に集まった流入民は、地域産業の発展を支える重要な労働力になった一方、仕事がなくなると盗賊行為を働き、雇い主の待遇に不満があると暴動を引き起こす悪影響も地域に及ぼした。これに対し、地方官らは、饒州府の通判に鎮を管轄させ、保甲を実施することで、この地域に対する地方行政の関与を強めたのである。

## 二 景德鎮における生活環境の破壊

以上のように、景德鎮では治安の悪化が問題視されたが、環境面でも問題が起きていた。明代地方官の記録によれば、景德鎮のある饒州府浮梁県ではもともと科挙合格者の多い地方であった。ところが景德鎮で窯業がさかんになってから合格者が一人も出なくなってしまった。その原因として、景德鎮での窯場建設や燃料の木材伐採のために風水の流れを乱したことが挙げられた。こうした風水の乱れによる人材枯渇の現象は、明代以前の史料や、山地開発の史料にも記述されている。官僚らは、風水思想に基づき、景德鎮における窯業の発展が、風水を乱して地域における人材難を生み、地域社会の衰退をもたらしていると考えていたのである。科挙の合格者が出なくなることは、学を修めた徳高き者として、朝廷で官職に就き、引退後は郷里をまとめる「士」身分の者が輩出されなくなるということである。それは、里甲制崩壊後、地方官と郷紳層を中心に再構築してきた地方の秩序に大きな影響を与えることを意味した。士大夫らにとって、風水の破壊は看過できない大きな問題であったのである。

### 小結

以上のように、景德鎮における開発問題を考察すると、世界を代表する「瓷都」へと発展をとげる一方、その内部で治安の悪化と環境破壊という問題を抱える、明末の景德鎮の社会状況が明らかとなる。景德鎮では、潘相が着任する以前から、治安の悪化や生活環境の破壊などの問題をかかえており、地方官はその対応に苦慮していたのである。景德鎮の問題は、不断に発展を続ける経済と、これを制御しようとする政治のせめぎあう明末社会の縮図でもあった。

## 第六章 景德鎮民変再考

### 序

本章では、景德鎮で起きた暴動、景德鎮民変について考察した。この暴動は、景德鎮の監督官となった宦官潘相の経営方針に、陶工たちが反発して起こした暴動である。この民変も従来は資本主義萌芽論の観点から、発展する民間工房と台頭する陶工たちに焦点があてられていたが、本章では、この暴動についても宦官の視点からあらためて考察することにした。

実は、宦官が景德鎮を監督することは少なくなく、嘉靖 9 年（1530）には、一時、地方官が監督するものの、万暦 27 年（1599）には宦官潘相が景德鎮を監督することになる。そして、潘相は、民変終結後も、あらためて景德鎮に駐留して陶磁生産を監督している。そこで、本章では、民変後の動きも含めて、全体的に景德鎮の問題を考察することとした。景德鎮民変の詳細は、民変終息後の動向も検討してはじめて明らかになるからである。

## 一 景德鎮の経緯

景德鎮民変の経緯は、先行研究によりすでに明らかにされているが、今一度、その経緯をたどることにする。

潘相が赴任して、まず問題となったのが、景德鎮の焼造を管理する地方官の人事を行ったことであった。これが宦官による官僚の人事権への介入であるとして、多くの官僚から非難の声があがった。また、陶磁器の輸送を陸運から水運に変えたことにも多くの批判が出た。そのようななか、ついに陶工らによる暴動が起きる。この暴動は、潘相やその部下の王四が横暴であったために、楊信三と呼ばれる人物が首謀者となって起こした暴動とされるが、その詳細は、明代当時の史料が少ないため、十分に解明されたとは言い難い。景德鎮民変のより詳しい背景は、民変後の動向も見て、初めて明らかとなるのである。

## 二 宦官潘相の景德鎮への再駐留

宦官による礦税・商税の徴収は、景德鎮以外でも民変を引き起こし、官僚たちの批判が強かったため、万暦帝は、万暦 30 年（1602）に続いて 33 年（1605）にも礦税廃止の詔を發布した。そこで、潘相は、景德鎮への再駐留と青料採掘の継続を求める上奏を出して、景德鎮への影響力の保持を謀った。実は、潘相は江西省赴任後まもなく青料の採掘も行っており、官僚から採掘中止の要請が出されていた。しかし、潘相の上奏が万暦帝の裁可を得たため、官僚たちから反対の声があがったのである。潘相は、これら官僚たちの反対の裏に、江西出身官僚である蕭近高が裏で糸を引いていると批判し、これに蕭近高が激しく反発するなど、官僚と宦官の対立は激化した。

## 三 潘相の景德鎮派遣の背景

それでは、なぜ潘相は民変後も駐留を続け、その任務から離れようとしなかったのか、潘相の陶磁生産監督の目的は何だったのか、そもそもなぜ、宦官が景德鎮の監督をするようになったのか、これらの問題について考察を行った。

従来、宦官潘相が景德鎮に赴任した目的について、景德鎮の陶磁生産が生み出す莫大な利益を収奪するためとされてきた。しかし、地方官僚らの青料採掘に反対する上奏文を中心に検討を行った結果、潘相が景德鎮を監督した目的は、万暦 19 年（1591）から 22 年（1594）までに注文された陶磁器の生産が遅れていたため、これを完成させることにあったことが分かった。青料を採掘した理由も、陶磁器を完成させるために外国産の青料だけでは足りず、国産の青料が必要だったからである。宦官潘相は、皇帝側近の宦官として、陶磁生産計画を忠実に実行することが期待されていた。民変が起きた原因の一つに、地方の事情より、中央の意向を優先させる潘相に対する反発があったと思われる。

また、潘相が民変後も景德鎮に駐留できた理由として、官僚たちから「奸人」・「奸商」と呼ばれる潘相の側に立った商人や青料の採掘業者たちの支持があったからだと思われる。彼らは潘相がいるからこそ、景德鎮の利益を得ることができるのであった。その分、これまで官僚の下で利益を得ていた業者らが不利益を被ってしまった。これも民変の原因の一つであろう。



#### 四 潘相退任後一明から清へ

万曆帝の死後、礦税は廃止され、潘相は北京に戻る。その後、景德鎮での陶磁生産は明末清初期の混乱により、ほぼ停止した状態となる。本格的に復興が始まるのは、康熙19年(1680)のことであり、乾隆帝の時代に最盛期を迎える。その体制は、皇帝の側近たる八旗の旗人が陶磁生産を監督し、青料は国産青料を使い、陶磁器の輸送は水運を使うという、宦官潘相の体制を受け継ぐものになった。

#### 小結

以上のように、景德鎮民変について、宦官の視点から暴動終結後の動向も含めた検討を行った。その結果、宦官が景德鎮を監督した目的が、単なる景德鎮の富の収奪にあったのではなく、遅れていた大量の陶磁器の納品を推し進めることにあったことが明らかとなった。景德鎮民変が起きた事情の一つに、納品達成という、地元の事情より中央より課せられたノルマを優先する潘相の姿勢への反発があったのである。また、潘相に対しては、鎮民だけでなく、官僚からも批判の声があがっていたが、ここでもやはり上饒県民変と同じく、地元官僚の既得権益がからんでいた。

しかし、こうした多くの人々の批判があったにもかかわらず、潘相が景德鎮に駐留し続けることができた理由に、潘相の下で利益を得た商人や開発業者の支持があったことがあげられる。潘相は万曆帝の死去するまで江西省に駐留し続けた。そして、宦官という皇帝側近が景德鎮を監督する体制は、清代に皇帝側近である旗人による監督体制として受け継がれたのである。清朝は、陶磁生産について、明末の生産体制だけでなく、監督体制も受け継いだのである。そこに、地方の現状を認めつつ、中央集権体制を志向する、清朝の特質が現れていると思われる。

### 第7章 清代康熙年間における柯昇・程鳳の叛乱について

#### 序

第七章では、以上の第一章から六章まで扱った銅塘山と景德鎮を舞台に、清初に起きた反乱について考察した。それは、清代康熙年間(1661~1722)に起きた柯昇・程鳳の叛乱である。柯昇は広信府副将、程鳳は饒州府参将という地位にいた、ともに清の武官であった。しかし、もと明の将軍、呉三桂・耿精忠・尚之信の三人が三藩の乱を起こすと、三藩側に寝返ってともに反乱を起こしたのである。

#### 一 反乱の経緯

柯昇・程鳳がなぜ反乱を起こすに至ったかは史料に書かれていない。しかし、三藩の一人、呉三桂が挙兵した際に、柯昇は「不軌を懐」き、耿精忠が福建で兵を挙げると、自身も兵を挙げるに至ったのである。これにより、耿精忠軍は銅塘山を越えて江西省への侵入に成功する。さらに柯昇の裏切りの知らせは饒州府にも届いて程鳳の叛乱を誘発させ、景德鎮が耿精忠や柯昇・程鳳の反乱軍の根拠地の一つとなってしまふ。その結果、江西省の東半分が彼ら反乱軍に占領され、西半分がこれに呼応する呉三桂の軍に占領され、清の江南支配を危機に陥れるのである。

この事態に康熙帝は江西省に大軍を投入し、まず江西省を奪還することにする。ここに清軍と呉三桂・耿精忠軍の江西省をめぐる戦いが、三藩の乱の帰趨を握るようになるのである。その戦いは、柯昇・程鳳の死後も続き、彼らの残党が山寇とともに江西・浙江・福建・安徽省境の山岳地帯に立てこもって反抗したため、長期化の様相を呈したが、康熙19年(1680)

によりやく鎮圧されるに至る。

## 二 柯昇・程鳳の乱の意義

それでは、三藩の乱という清初期最大の反乱において、柯昇・程鳳の乱にどのような意義があったのであろうか。

まず、挙げられるのが、三藩の乱の戦局に大きな影響を与えたことである。康熙帝は当初、江西省を速やかに押さえ、湖南省に入って呉三桂の主力軍を叩く作戦を描いていた。ところが、柯昇・程鳳が裏切ったため、耿精忠軍に江西省東部を広く占領される事態を招き、湖南省への進軍は遅れ、反乱を長期化させる結果をもたらしたのである。また、柯昇・程鳳の乱が拡大した原因の一つに、銅塘山と景德鎮を押さえられたことがある。銅塘山は、江西・福建・浙江三省をつなぐ交通の要衝であり、景德鎮は、江西省と安徽省をつなぐ交通の要衝であった。両者とも江西省において地理的に重要な位置を占めていたのである。また、江西省自体も湖南・福建・広東に境を接する地理的に重要な地域であったことも明らかとなった。

### 小結

以上、清の康熙年間に起きた柯昇・程鳳の乱について考察した。この反乱に対する考察により、柯昇・程鳳の叛乱が三藩の乱の戦局に大きな影響を与えたことが明らかとなった。それは清朝の想定より長期化する様相を呈したが、原因として、耿精忠・柯昇・程鳳の軍のほかに、山寇たちが省境の山間部で執拗に抵抗したことが大きかったと思われる。

また、本稿で取り上げた銅塘山・景德鎮が江西省の中で地理的に重要な位置を占めること、江西省が、華北地方に本拠地を置く王朝の江南支配において重要な位置を占めることも明らかにした。

## 第八章

### 序

本章では、江西省から考察の舞台を北京に移し、明末北京における流入民の問題と、それが明末の政局に与えた影響について検討した。これまで上饒県民変や景德鎮民変を考察したが、これらの問題の鍵となったのが、いずれも流入民たちであった。例えば、上饒県民変の原因は、銅塘山の山地開発であったが、開発の背景に山区経済の発展と開発者の台頭があり、それを支えたのが山区へ流入した人々であった。また、景德鎮民変は、鎮の陶工たちが起こした暴動であり、背景に陶工の台頭があったが、それを支えたのも陶工に就職した流入民たちであった。このように、人口流動が、山区経済や景德鎮民窯の発展を支える一方、暴動を引き起こす原因にもなり、地域秩序を揺るがしていたのが、明末清初期の地方の状況であった。それでは、このように、流入民が江西省の上饒県や景德鎮で様々な社会問題を引き起こしていた頃、北京の社会状況はどのようなようであったのであろうか。

#### 一 北京の治安悪化

実はこの頃の北京でも多くの流入民が城内に入り込み、治安の悪化を引き起こし、政情を不安定なものにしていた。明の首都として、早くから様々な人々が集まっていた北京には、農村や軍から逃亡した人々、盗賊、無頼の徒、邪教徒、蒙古族や満州族のスパイなどが城内に潜伏し、北京社会に溶け込んで暮らしていたのである。政府は火甲制を組織して、流入民の取り締まりを何度か試みたが、効果はなかった。

万暦年間（1572～1620）には、「東征」（豊臣秀吉の朝鮮の役に対する明の出兵）の終結

により失職した兵士が北京に流入し、不測の事態が起きるのではないかと問題視された。潘相が江西省に派遣されるきっかけとなった「礦税の害」は、彼らが礦税・商税の徴収を宦官に勧めたことがきっかけで起きたものである。北京への流入民は、朝廷の政策にも影響を与えていた。

## 二 皇城の治安悪化

こうした治安の悪化は皇城内にまで及んだ。皇城の警備は早くから弛み始め、人の出入りの管理がずさんになった結果、城内は無頼の徒の溜まり場となり、官僚や宦官の賄賂のやり取りも行われる汚職の場と化した。また、宦官が外部の人間と関係を持ち、城内の機密が洩らされることも問題化した。警備が弛緩していたのは皇城だけではなかった。北京の内城・外城の城門の警備もおろそかになっていた。城門の監督官である宦官が、城門警護の軍人を私的に使役していたためである。その結果、万暦43年(1615)には、「挺撃案」という皇太子の暗殺未遂事件が起きてしまう。これを受けて、各城門の警固の強化が叫ばれたが、事態は改善しなかった。

## 三 流言の発生

また、北京では、天順末年よりすでに「不逞の徒」の流言が問題になっていた。万暦年間(1572~1620)にも万暦帝の皇太子の選定をめぐる怪文書が出回り、政局を混乱に陥れている。その流言の出どころとして、山人・游客・罷間官吏・亡命・僧道などが挙げられ、彼らを北京から追放するよう上奏する官僚もいた。「山人」とは「隱逸の士」であるが、権力者におもねり、流言を流すものが多かったとされる。また、「游客」とは各地を遍歴して遊説を行う者、「罷間官吏」とは免官されて閑居を余儀なくされた官吏をいう。彼らが北京に潜伏して流言を流し、政局にも影響を与えていたのである。

## 四 明末の北京防衛と治安維持

以上のように北京には、各地からさまざまな人々が入って住み着き、北京の社会や中央政界にも一定の影響を与えるようになっていた。こうした北京の社会状況は、万暦末年に、満洲族の勢力が拡大して明朝の安全を脅かすようになると、北京の防衛に関わる問題として、官僚らの関心を集めるようになった。

万暦47年(1619)に、明がサルフの戦いで後金に敗れると、官僚だけでなく、北京の住民に大きな衝撃を与えた。デマがあちこちで起こり、官吏や士人、商人までが北京から避難する一方、各地から食を求めて飢民が集まり、無頼たちの犯罪が多発し、邪教徒が布教活動を行い、後金のスパイが潜入するなどの問題が起きた。内閣大学士方從哲は城門の警備を強化し、不審者の侵入を防ぐよう上奏した。北京の治安維持が、首都防衛策の一環として重要な課題になっていたのである。

## 小結

このように、江西省上饒県の銅塘山や、浮梁県景德鎮で流入民たちが産業の発達を支え、かつ様々な社会問題を引き起こしていたころ、北京でも外部より多くの人々が流入し、治安の悪化や政情不安などの問題を引き起こしていたのである。そして、治安の悪化は皇城内にまで及び、明の政局にまで影響を与えるまでになった。明末の銅塘山や景德鎮の経済発展を支え、暴動の主力となったのは、農村を離れた流入民たちであったが、彼らは北京においては、中央政局にまで影響を与えるようになっていたのである。

## 結論

以上、本稿では、主に明末清初期の暴動と反乱を主題に考察を行った。暴動は、明の万暦年間、宦官潘相が江西省で引き起こした上饒県民変と、景德鎮民変を扱い、反乱については、清の康熙年間の三藩の乱に触発されて起きた柯昇・程鳳の乱を扱った。

第一章から四章まで、明の万暦年間、江西省上饒県で起きた民変について考察した。この暴動は、中央より派遣された宦官潘相が、上饒県にある禁山区、銅塘山で、樹木の伐採や鉱山開発を実施したことから起きた暴動である。まず、第一章では、上饒県民変を考察するにあたり、銅塘山が、なぜ人々の立ち入りを禁止した禁山区に指定されたのか、その歴史をさぐった。その結果、漢族の南方進出以来、平野部から山地へ開発を進める移住者と、これを管理したい王朝の確執の歴史があったがゆえに、この山が封禁されたことを明らかにした。そのうえで、第二章では、銅塘山の開発をめぐる起きた上饒県民変を考察した。宦官潘相がこの山を開発した背景に山区経済の発展があり、上饒県民や官僚たちが潘相の事業に反対した理由に、開発が地域にもたらす治安悪化や環境破壊の問題があることを明らかにした。さらに地方官僚の対応について考察した結果、彼らの批判の裏には、地元で既得権益を持つ地元出身官僚の支持があったことを明らかにした。

第三章では、上饒県民変の結果が清代の山地政策に与えた影響について調べた。銅塘山開発の議論は清代に入ってもたびたび起こる。その都度、清代官僚が参考にしたのが、上饒県民変に対応した上饒知府李鴻の残した史料であった。本章での考察により、明末の上饒県民変が、明代に起きた単なる暴動の一つなのではなく、清代にまで影響を与えた暴動であることを明らかにした。そして、第四章では、官僚による山地開発論を取り上げた。実は山地を開発する議論は、宦官からだけでなく、官僚からも出ていた。彼らは流動人口による治安の悪化の問題を解決するために、山地資源の有効利用を訴えた。この四章での考察を通じて、上饒県民変における山地開発の問題は、明代だけの問題なのではなく、清代、そして現代中国の経済・人口・環境問題にもつながることを明らかにした。

第五章と第六章では、江西省浮梁県景德鎮で起きた民変について考察した。この民変も宦官潘相が引き起こしたものである。この暴動の考察にあたり、まず、第五章では、陶磁器の名産地として発展を続ける景德鎮の抱えた負の側面を明らかにした。産業都市として拡大する景德鎮には多くの人々が仕事を求めて集まって、やがて治安の悪化をもたらす、地域対立による暴動を引き起こした。また、窯場の建設が環境破壊をもたらすなど、地域社会に動揺をもたらしたのである。そして、第六章では、反宦官民変である景德鎮民変を考察した。この暴動に関する先行研究は多いが、筆者は、これをあらためて考察し、宦官が景德鎮を監督した目的が、単なる景德鎮の富の収奪にあったのではなく、遅れていた陶磁器の納品を推し進めることにあったことを明らかにした。また民変の裏に、潘相の下で利益を得た商人や開発業者がいたことや、この暴動の背景にも地元官僚の既得権益がからんでいたこと、宦官潘相が景德鎮で行った政策が清代に受け継がれたことも明らかにした。

第七章では、これら上饒県銅塘山と浮梁県景德鎮を舞台に、清代康熙年間に起きた、柯昇と程鳳の叛乱を取り上げた。柯昇、程鳳はそれぞれ清の武官であったが、三藩の乱が起きると、三藩側に寝返って挙兵した。本章では、この反乱に対する考察を通じて、銅塘山と景德鎮の地理的特質を明らかにするとともに、江西省の地理的重要性をも明らかにした。また、柯昇・程鳳らとともに兵を挙げた山寇の活動により、この反乱が長期化したことにも注目した。

最後に第八章では、明末北京における流入民の問題と、それが明末の政局に与えた影響について考察した。明の首都として、早くから様々な人々が集まっていた北京には、農村や軍から逃亡した人々、盗賊、無頼の徒、邪教徒、蒙古族や満州族のスパイなどが城内に流入し、北京社会の治安の悪化をもたらしていた。さらに彼らの活動は皇城内にまで及び、明の政局にまで影響を与えたのである。

以上の考察を通じて、発展する経済と、その利益をめぐる官僚・宦官の権益争い、人口流

動と治安の悪化・環境破壊の問題、資源の有効利用と平等な分配の問題など、現代中国の問題にもつながる激動の明末清初期の様相を明らかにした。